

ゴットフリートの『トリスタン』における 策謀の力学 (1)

—トリスタンのアイデンティティー獲得と宮廷の陰謀—

田 中 一 嘉

序

「策謀家」トリスタン：トリスタンの基本的人物像

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタン』¹の主人公トリスタンは、「悲しいことに、苦難に恵まれた人生を送ったのだった」(v. 2130)と、詩人ゴットフリートによって前途多難なる人生が最初の試練が始まる前にすでに予告されているように、その出生から死に至るまで、波乱に満ちた人生を送る。そもそもトリスタンの出自・血統には二重の意味が含まれている。トリスタンは、パルメニーエ領主リヴァリーンとコーンウォール王マルケの妹ブランシェフルールとの間に生まれた子であり、コーンウォールを統べるマルケ王の甥という高貴な血筋を有しているが²、生まれる前に父を亡くし、誕生と同時に母も失う。そうしてトリスタンは、リヴァリーンの実忠なる家臣ルーアルの息子として育てられる。この隠された出自と養父ルーアルの存在は、後にトリスタンのアイデンティティー形成に深く関わってくる。

トリスタンの才能のうち、養父ルーアルの教育によって開花したのは、何よりもまず語学と音楽に関する才能であり、この二つの才能はトリスタンの人物像において揺るぎないものである (vv. 2043-92)。そして、騎士として必要な騎乗術や剣・槍の扱い、狩猟法といった宮廷風の(雅な)嗜み、あらゆる宮廷風の遊びにも通暁していただけでなく (vv. 2093-2127)、「彼が14歳に達したとき、主馬頭〔ルーアル〕は彼を故郷へ呼び寄せ、絶えず〔領地を〕騎行によって旅してめぐり、人々と領地のことを知るよう命じた」(vv. 2131-36)ように、領主としての帝王学も施された。幼少期からこのような英才教育を受けた「トリスタンのように、当時その国のどこにも、徳行に溢れた生き方をする子どもは絶えてなかった」(vv. 2140ff.)ことから、「世の人々は彼に親しみの眼差しを向け、好意を抱いた」(vv. 2144f.)のであるが、ゴットフリートは物語を展開させる際、その都度トリスタンの才能の開陳とそれに対する人々の称賛という図式を効果的に組みこんでいる。

しかしそれ以上に、トリスタンの所有している才能の中でも物語の展開上、特に目を引くのが機転・智謀に富んだ性格であり、彼に対する「思慮深い (*sinnesame*)」という形容は、いわば枕詞として頻出する³。ただし、彼特有の「機知にとんだ策謀家気質」は、(たとえその素養がはじめから備わっていたにせよ) 物語の進展と共に次第にその姿を現してくるものでもある。この気質が

躍動するのは、彼の実存が脅かされる時であり、この実存の危機は、彼に一種の「外圧」が働くことによって引き起こされる。この外圧がどのような形で現れ、どのようにしてトリスタンがそれを乗り越えるか、そのメカニズムを解明するのが本稿の目的であるが、この外圧は、二つの様態をとっている。そのひとつとして、トリスタンを取り巻く周囲の人物たちが彼に対してめぐらした何らかの策動あるいは陰謀が挙げられ、他方では、単に彼にとって「不都合な状況」として彼の眼前に表れる場合である。

そして、このメカニズムを解明するにあたって、トリスタンのアイデンティティー形成の過程も併せて考察する必要がある。というのも、彼のアイデンティティーは、その出自からして社会的に不安定なものであり、彼のアイデンティティーが形成される過程と、彼の策謀家気質が発揮されていく過程は密接に関係しているからである。トリスタンのアイデンティティー形成と彼にかかる外圧との相関関係のダイナミズムは、単に個々のエピソードの内的連関を構築しているだけでなく、例えば物語全体の展開を構造的に支える叙事的構想あるいは伝記的構想⁴とも一致するだろう。とりわけ、「この〔伝記的〕図式は、個人の人生の方向探知と確認によるアイデンティティーの安定化に役立つもの」⁵と見做すことが可能あり、その意味において、トリスタンの知性と、周囲の人々・状況による外圧の相互作用の図式は、時系列の進行に従って段階的に上昇していくように見える。そして、この段階的上昇は、「媚薬」エピソードを境に、その前を「命を守るための知略」、その後を「イゾルデとの恋を秘匿するための知略」とに区分することが可能である。本稿では、前者「命を守るための知略」を中心に扱い、後者に関しては稿を改めて考察する。

1. トリスタンの誘拐：最初の策謀

若きトリスタンの最初の試練は、養父ルーアルの許からノルウェーの商人たちによって誘拐された事件にはじまる。この誘拐事件は、トリスタンが商人の船上でチェスに興じている間に起ったが、商人たちのこの計略は、トリスタンがそこで披露した外国語と音楽の才能に対する感嘆と称賛の念に端を発しており (vv. 2234-42; 2270-86)、彼らはトリスタンの「宮廷的教養 (*cūrtōsie*)」 (v. 2296) ゆえに、「何らかの策を用いて (*mit keiner slahte sinnen*)」連れ去ることができれば、「大きな利益と名誉を得ることができる」と考えたのであった (vv. 2300ff.)。後にトリスタンが、「ああ、なんでわたしはあの不吉なチェス遊びを拒まなかったのだろうか！ わたしはチェスを永久に呪うだろう」 (vv. 2592ff.) と嘆いたところで、彼が「勝負にあまりにもものめり込んでいた」 (vv. 2314f.) のは14歳の子供にとってはごく自然のものであり⁶、またその場で披露した数々の宮廷的教養と技能は、決して自身の才能をひけらかそうとする軽率な行いゆえのものではなかった。むしろこの誘拐は、商人たちがトリスタンを「盗賊のように奪いとった」 (vv. 2448f.) ものであり、彼らの「罪と不実」 (vv. 2446f.) である。それ故に、この航海は神の逆鱗に触れ、海は嵐の様相へと激変する⁷。

結果、トリスタンはコーンウォールに流れ着くが、ここで初めて彼は命の危険を感じとる (vv. 2498-2513)。目下、彼の目的は「助かるために誰かを見つけること」 (vv. 2529ff.) であり、彼の意

識はそこに向けられ、知略もそのために働く。そこからトリスタンの、「彼の年頃にしては、非常に用心深く慎重 (*vil wol bedâht und sinnesam*)」(vv. 2692f.) な本領が発揮される。

まず、二人の老巡礼者に対する作り話が捻出される。ゴットフリートはここでトリスタンが語った話を「奇妙な物語 (*vremediu maere*)」(v. 2694) と形容しているが、その内容はトリスタンの置かれている状況に即したありえそうなものである。トリスタンは巡礼者に対して、自分はこの土地の者であり、狩りの仲間たちとはぐれ、道に迷ってしまったと状況を説明する。彼らが出会った場所は森の中であり、森は狩猟の場としての機能を有していること、また、彼がその時着ていた衣服は、宮廷人に相応しいもの (vv. 2534-52, vgl. auch vv. 2857f.) であったことから、トリスタンは、宮廷と関わりのある身分 (狩猟をする人々⁸) を設定したと考えることができる。実際、「彼らに向かって宮廷風に立ち上がり、その美しい両手を胸の上に押し当てた」(vv. 2673f.) トリスタンの礼儀正しい挨拶は、巡礼の目に留まり、それがためにトリスタンは彼らの好意に与ることができたのである。

その後、トリスタンの架空の設定は現実のものとなる。ちょうどそこにマルケ王の狩猟団一行が現れる。そこでもトリスタンの宮廷的素養が彼自身を助ける。狩猟頭はトリスタンの宮廷風の礼儀正しい風貌を認め、彼に鹿の皮剥ぎを任せる (vv. 2830-42)。トリスタンがそれを見事にやったこと、何よりも彼の立派な立ち居振る舞いにより、一行の者たちも彼 (の素性) に関心を持ち (vv. 2850-61)、今や「異国の客人」(v. 2921) となったトリスタンは、当面の身の安全も確保される。

マルケ王の宮廷に参内する道すがら、まとも思慮深いトリスタンは全く子供に似つかわしくない話し振りで「彼が作った物語 (*sin âventiure*)」(v. 3093)⁹を語り始める：

ブルターニュの彼方にとある国がありますが、それはパルメニーエという名前です。その国でわたしの父は商人 (*ein koufman*) をしておりました。父はその身分に相応しく立派で裕福な暮らしをしております。もちろん商人らしく、という意味ですが。そして是非お知りおき頂きたいのは、父が土地や財産よりも徳高い心に富んでいることです。父は、わたしにできることは何でも、わたしに教えさせました。今や異国からの商人たちがそこにしばしばやって来くるようになりました。わたしは彼らの言葉や風習に関する事柄によく注意を払っていましたが、そうこうしていると、わたしの心は、異国へ行きたいと願うようになり、外国へ行くように絶えずわたしを駆り立てるようになりました。そしてわたしは、見知らぬ人々と異国の地を是非とも知りたくなったので、朝から晩まで、父の許を離れ、商人たちと旅に出ることを考えるまどになりました。そうしてわたしはこの地にやってきたのです。 (vv. 3097-3121)

これは真実と虚偽の入り交ざった報告でもある。パルメニーエ出身で、商人の出であることは、商船に乗って異国へやってきたという事実を踏まえているだけでなく、「好奇心」ゆえに親許を飛び出したことは、若輩者がひとり異国で放浪していた状況を説明するためには的を射たものと言えよ

う。

この一連の出来事において、トリスタンの宮廷的振る舞いと其の礼儀正しさが、巡礼、狩猟団、宮廷の人々の関心を惹き、結果、彼自身の身の保全が確保されたのであるが、しかし、トリスタンのその類い稀なる振る舞いは、狩猟頭の目には商人のものとは映らなかった (vv. 3277-83)。ここでトリスタンは、出会った人々、巡礼者や狩猟団、そしてマルケ王に対して、なぜ事実をありのままに説明し、彼らの庇護にその身を委ねなかったのか (これは十分に見込めそうな想定であるが)、なぜ敢えて虚構の設定を作り出さねばならなかったのか、という疑問が浮かび上がってくる。この点について考え得るのは、トリスタンが、自らの好奇心のために父の許を自ら抜けだし、外国の商船に乗り込んだとすることで、意に沿わぬかたち(誘拐)でティンタヨールの地に流れ着いたという実情、すなわち易々と誘拐を許してしまったルーアルと自らの軽率さを蔽い隠し、面目を保っていると考えることができる。なぜなら、狩猟団が彼の素性に関心を寄せていることをトリスタンは察知しており (vv. 3084-93)¹⁰、将来彼(とルーアル)の不利益になりそうな事情は伏せておいた方が賢明である、という洞察が働いたと考えることが出来る。このことは、話の中で「父は資産よりも高潔な心に富んでいる」と述べ、実際的な立場よりも内面的な徳高さを強調している部分からも推し量ることができよう。また、仮に自分がパルメニーエの領主の家門(貴族)出身であることを公にしたとしたら、宮廷間の政治的関係性を鑑みれば、トリスタンが「客人」としてではなく「人質」として扱われる可能性も否定できない。すなわち、ルーアルにトリスタンの身柄を引き渡す際に、政治的駆け引きの道具として扱われる可能性がある。その意味でも、彼が商人という身分を選択することで、マルケ王の宮廷内における活動と身分上の自由が保障される可能性が一層高くなることは疑いようがない。なぜなら「(あなたがたがお聞きの通り、今や)トリスタンは、そうとは知らずに故郷にやってきたのだが、しかし彼は自分を異邦の者だと思っていた」(v. 3379ff.)からである。

このように、コーンウォールにおけるこの一連の作り話は、彼自身の生命の安全を確保するためにでっちあげられたものではあるものの、誰かを欺くためのものではない。加えて、その内容は、トリスタンが身につけた素養の範疇を越え出るものでもなければ、自らを極度に貶めるものでもない。その意味では、トリスタンが宮廷人としての素養を見せることは、彼が生き抜くための唯一の方策、そして彼が為し得る唯一の振る舞い方だったのである。

2. トリスタンに向けられたマルケ王の寵愛あるいは嫉妬の潜勢力

2-1. マルケ王の「友」トリスタン

マルケ王の宮廷でのトリスタンの容姿と振る舞いは宮廷貴族そのもの、しかも群を抜いたものであった (vv.3331-50)。そして、彼に対する一同の格別の称賛は、マルケ王の対応にも影響を及ぼす。ここでマルケ王は、トリスタンを「友 (*vrunt*)」(v. 3352; 3377) と呼び、「王の家臣 (*des küneges ingesinde*)」(v. 3395) として迎え入れている。しかも、「彼〔マルケ王〕はすべての廷臣

たち (*hovegesinde*) に、この異邦の少年に親しく、そして丁重に接し、彼に対して恭しく話しかけ、親交を持つようと、特に要請し、命じたのだった」(vv. 3386-91)。そして「彼ら〔廷臣〕は皆、進んでこの要請を受け入れたのである」(v. 3392f)。このときの廷臣たちとマルケ王のトリスタンに対する熱狂は、相互に作用しながら一挙に高まっていく¹¹。マルケ王は、「彼〔トリスタン〕に大きな好意 (*harte holden muot*) を抱き、王が彼を見るとき、それは王にとっての喜びとなった」のである (vv. 3406f.)¹²。

一方のトリスタンも；

王にはじめて会ったとき、彼は王のことを他のあらゆる人々にも増して好ましく思った。彼の心が王を選びとったのだが、というのも、彼は王の血筋の者だったからである。本能 (*diu natüre*) が彼を引き付けたのだ。(vv. 3240-45)

また、「マルケ王がどこにしようと、あるいはどこへ行こうと、トリスタンもまたいつも片割れのごとくそこにいた」(vv. 3403ff) (マルケ王の宮廷に留まった) のは、このためであった。マルケ王の宮廷で居場所を確保したトリスタンは、再び狩猟での活躍を見せ、「それ以来、彼らの許で愛される廷臣 (*ein lieber hoveman*) となった」(vv. 3486f.) のである。

この狩猟エピソードの繰り返しと並んで、ゴットフリートはここで再び、トリスタンの人物像を特徴づける語学と弦楽器の才能を宮廷の面々に披露させる。トリスタンがその才能を披露するに至ったのは、ウェールズの旅芸人の演奏に感動したからであり、彼に備わった素養ゆえの自然な感情の発露であった：

たとえどんなに身体に命じたとしても、彼〔トリスタン〕は、彼の気持ちが感動を覚え始め、彼の心がその気持ちで満たされたことを隠すことはできなかったであろう。(vv. 3518-21)

豎琴弾きに演奏を促された「新米の楽人 (*der niuwe spilman*) トリスタンは、細心の注意を払いながら彼の新しい職務 (*sin niuwez ambet*) をはじめた」(vv. 3562ff)。そして再び彼の才能に対して宮廷の人々から、狩猟の場面同様の称賛が湧きおこる (vv. 3706-20; 3742-49)。この弦楽器の才能は、この後のタントリス・エピソードおよびガンディーン・エピソードにおいて重要な意味を持っていることから、ここでゴットフリートが効果的に再確認 (ただしマルケ王の宮廷でははじめて) していると言える。

ところで、マルケ王もまた再びトリスタンに、「さあ我々は友になろうではないか、そなたはわたしの友であり、わたしはそなたの友だ」(v. 3725f.)¹³ と呼びかけるが、この呼びかけは、R. Gruenterによれば、ミンネに関する男女の甘い会話を想起させるような「公然の愛情の告白」¹⁴、ひいては R. Krohnのように、この二人の関係を同性愛的なもの¹⁵ と見做すことも可能なほどに、

度を越しているとも言えるものである。この点については、忠義者ルーアルが息子トリスタンを探し求め、その4年目にしてコーンウォールの宮廷へ辿りついた場面にも言及する必要がある。

2-2. トリスタンの「父」マルケ

ルーアルがマルケ王の宮廷で初めて語ったトリスタンの出生の真実によって、トリスタンがマルケの甥であることが判明し (vv. 4171-4261)、マルケ王はすぐさま、「まことに、そなたとわたしが生きている限り、わたしはそなたの親代わり (*erbevater*) となろう」(vv. 4300f.) と語る¹⁶。しかし、この真実は、トリスタンのアイデンティティーに痛恨の衝撃を与えた。トリスタンは、「この誠実なる人〔ルーアル〕のうちに、父を失い、それゆえ父があるという思いも失われた」(vv. 4230ff.) だけでなく、実父リヴァリーンもすでに死んでおり、二人の父親を同時に失った父なし子 (*âne vâter sîn*) という意識に襲われる (vv. 4370f.)。しかもルーアルはリヴァリーンの忠実なる家臣であったが故に、今や自分の家臣でもある、という主従関係が二人の間に生じている。そこにマルケ王までもが親代わりとして割り込んでくる。偽りのものではあるにせよ、商人たちに誘拐されてからこの方、「商人の子」として生きてきたマルケ王の宮廷での関係性は一変する。

ルーアルは、マルケ王からトリスタンがどのような知恵 (*kündekeite*) を働かせてコーンウォールの宮廷へやってきたか、彼が自分の父は商人であると語ったことを聞き及び (vv. 4347-51)¹⁷、依然心揺れるトリスタンに対し、ルーアルもまた思慮深い配慮から (主馬頭としてではなく) 商人としてトリスタンに声をかける：

わたしの来訪によってそなたは、自分が思っていたよりも高貴になり、これまで以上に名誉を授かるのだ。そして、今までのようにそなたには、ここに居られるわたしの主君〔マルケ王〕とわたしという、二人の父があるのだ。(中略) わたしの主君でありそなたの伯父君にお願いしなさい。そなたの帰国を援助し、そなたをここで騎士に取り立てて下さるように。というのも、そなたはもはや自分のものは自分で立派に治めることができるのだから。(vv. 4381-95)¹⁸

ルーアルはここでトリスタンに、商人の子としてではなく、領主として「これからはあらゆる諸王にひけをとらぬ者になれ」(vv. 4388f.) と、トリスタンが本来のアイデンティティーを獲得するよう助言をする。この助言を受けて、トリスタンは騎士として生きる決意を固める (vv. 4405-45 および次節参照)。

そしてマルケ王は、この決意に対して、(マルケ王もその権利を本来要求することのできる) パルメニーエの領有権がトリスタンに帰属していることを確認しただけでなく、「わたしがそなたを援助しようではないか。わたしが有している国であれ、人々であれ、愛する甥よ、そなたが自由に構わない」(vv. 4460ff.) と破格の援助を約束する。もちろん、このような申し出は、一種の形式的な定型句であり¹⁹、マルケ王のこの演説に対して、「彼ら〔この話を聞いていた人々〕は、喝

采をもって王に名誉と称賛の念を示した」(vv. 4492f.)のも宮廷における型どおりの振る舞いと言えなくもないが、この約束は後により具体的な内容を伴って繰り返し提案されることから、トリスタンとマルケ王の関係においては特別の意味を持っていると言える。すなわち、トリスタンがパルメニーエへ帰国するためマルケ王に暇乞いをした際、マルケ王はトリスタンが再びコーンウォールへ戻ってくることを要請し、そのためにトリスタンの手をとって以下のことを宣誓する：

わたしはわたしの財産と領土をいつまでもそなたと分かち合おう。そしてもしそなたがわたしよりも長生きするような、幸運に恵まれたとしたら、すべてをそなたのものとして与えよう。と言うのも、わたしはそなたのために、わたしが生きている限り、結婚して妻を持つつもりはないのだから。甥よ、わたしの願いとわたしの考えがよくわかっただろう。わたしがそなたを愛しているように (*holt sîn*)、そなたがわたしを愛してくれるなら、わたしがそなたに抱いているような真心 (*herze*) を、そなたがわたしに抱いてくれるのならば、神かけて、我々は共に喜びに満ちた日々を送ることになる。(vv. 5154-67)

ここに見られるような、トリスタンに遺産を相続させるため、あるいは共同統治という形態を念頭に置いて、自らの結婚を放棄するほどの寵愛ぶりは、前項(2-1)で見たように父性的な愛情だけに由来するとは限らないかもしれない。トリスタンに対するマルケ王の「真心」がどのようなものかについては、ここではこれ以上深く立ち入らないが、彼のトリスタンへの寵愛と重用は、たとえトリスタンが商人出の「流れ者」から「マルケ王の正当な親族」へと宮廷内での立場が変化したにせよ、宮廷の廷臣たちから見れば極端な「依怙最眞」であったこと、あるいは、彼らに嫉妬心を抱かせる潜在的な遠因のひとつであることは想像に難くない。ただし、彼らもまた、マルケ王同様にトリスタンの立ち居振る舞いに感嘆し、マルケ王のこの処置に敬意を払っていたように、ここではまだ彼らの嫉妬は顕在化していない。

3. トリスタンのアイデンティティーの再獲得

3-1. 三人の父親

トリスタンは、刀礼の儀を経て騎士となり、パルメニーエの領主ともなるが、ゴットフリートがこの場面を、いわゆる「文学付論 *Literaturexkurs*」(vv. 4589-4832)²⁰と共に、騎士の在り方について彼独特の抽象的表現を駆使して、荘厳かつ長大に描き出したのは、トリスタンが主に語学と音楽の才能によって宮廷での名声を高めていったこれまでの状況から、騎士として身を立てる展開へと移行していくことを効果的に示すためだと考えることができる。そして、ここでゴットフリートはトリスタンの人生について再び²¹以下のように語っている：

生ある者の中で、絶えざる幸福にありながら、絶えざる悩みを抱く者がいたとすれば、トリスタンこそ絶えざる幸福のうちで、絶えざる悩みを抱いた人であった。(中略) 彼に与えられた終極の目的とは、苦悩と幸福という二つのものだった。というのも、彼がはじめたことは何でも、彼にとってたいがい首尾良くいったが、その幸運には常に苦しみが伴っていたからで、その苦しみは、その幸運の比ではなかった。(vv. 5069-80)

コーンウォールを統べるマルケ王の甥であることが分かり、騎士として列せられ、パルメニーエの領主ともなった幸せ者トリスタンの「心をひどく苦しめたのは、ルーアルによって知らされたように、彼の父は打ち殺された、ということであった。こうして〔誰の胸のうちでも起るように、トリスタンの〕胸のうちでは、善きことには悪しきことが、幸運には苦しみが、喜びには悲しみが固く結び付いていた」(vv. 5093-98) のである。このとき感じていた彼の苦しみや悲しみは、「敵意 (*haz*)」という感情によって表に現れる。というのも、ゴットフリートによれば「敵意というのはいつも、分別ある人よりも、若い人をよりおおきな憤怒へと駆り立てるもの」(vv. 5010ff.) だからであるが、このように、トリスタンのパルメニーエでの真の目的は、実父リヴァリーンのとの関係の再構築、すなわち父リヴァリーンの死に対する復讐を果たすことであった²²。トリスタンがこのような自意識を持つに至った理由のひとつに、当時、父の復讐を果たすことは子に課せられた(相続された)義務²³でもあったことが挙げられよう。これを行動に移したトリスタンは、巧みな戦略によって²⁴、仇敵モルガン大公の軍勢を倒し、パルメニーエに対する諸権利を復権する (v. 5609-33)。

ところで、トリスタンのマルケ王の宮廷からの一時的な離脱は、トリスタンにとって真の意味での騎士としてのアイデンティティー獲得の旅立ちであり、後に彼がマルケ王の宮廷に復帰するために必要な通過儀礼であったのと同時に、マルケ王の宮廷にとっても重要な意味を持っている。というのも、これは(パルメニーエの領主)トリスタンとマルケ王が統べるコーンウォールの宮廷との関係(いわばこれまで忘れられてきた関係)の再構築を意味するものでもあり、この関係のうちには、単にトリスタンとマルケ王の個人的な関係だけでなく、領土間の政治的・政策的関係も潜んでいる。もっとも、トリスタンとマルケ王の間では、このような政治的関係を前提とした交渉がなされていたわけではなかった。もちろん彼らの身分と宮廷における立場上、彼らの行為は、本人が意図しようがしまいが、必然的に何らかの政治的色調を帯びることになるが、彼ら二人の関係における各々の意志と振る舞い方は、あくまで個人的範疇に留まるものとして理解されるだろう。その意味においては、先に見たマルケ王の寵愛は、宮廷人という公の場においては、そして一国の主としては「度を越した」ものと認識され得るものだが、トリスタンもまた、彼自らの(私的な)意志によってマルケ王の宮廷に復帰することを望む。つまり、リヴァリーンの子としてのアイデンティティーを(ここで初めて)再獲得したトリスタンは、次いで養父ルーアルと伯父マルケ王への恩義の間で揺れ動く (v. 5634-46)²⁵。この二者択一はトリスタンのアイデンティティーにとって非常に

重要な事柄であり、その立脚点がどこにあるのかを詩人は以下のように明示している：

神はご存じだ、ここで彼が帰らねばならぬことを。我々もこれを彼に認めねばならない。彼は名誉を増し、意気を高めねばならない、もし彼に利益がもたらされ、また幸運に恵まれたとすれば。彼はあらゆる名誉を当然のように求め、それを得ようと努めねばならない。幸運の女神 (*saelde*) が彼に名誉を授けようと思えば、それは当然そのようになされるであろう、というのも、彼の意識のすべてが名誉に向かっているからなのだ。 (vv. 5670-80)

ここでゴットフリートは、「一人の男は二つのもの〔身体と財産〕から成っていて」、「高貴な心映えとこの世の名誉はこの二つに由来する」としており (vv. 5696ff)、トリスタンは、パルメニーエ (財産) をルーアルの世襲領地とすることによって、領主としての立場²⁶と養父に対する親子の情を示すと同時に、(身体を) 再び一介の騎士としてマルケ王の許に向けて旅立つことで、「自身を二人の父親に等しく分かち与えようと決心した」 (vv. 5684f)。つまり、トリスタンがコーンウォールの宮廷に復帰しようとするのは、政治的関心などではなく、個人の感情に由来する意志の表れなのである。トリスタンは、このように三人の父親 (リヴァリーン、ルーアルそしてマルケ王) それぞれに対する恩義あるいは義務感を果たすことで、ノルウェーの商人たちに誘拐されて以来、一度は失ったパルメニーエの貴族的宮廷人としてのアイデンティティーを再び取り戻し、今や騎士としてのアイデンティティーに全精力を注力する準備が整ったのである。

3-2. モーロルトとの決闘：「個」対「集団」の構図

トリスタンがティンタヨーエルの宮廷に戻った時、ちょうどグルムーンが治めるアイルランドと結んだ屈辱的協定のために、貢物 (人質) を選び出すくじ引きが行われているところであった²⁷。この不当な圧政のことをトリスタンは以前から知っており、彼の騎士としてのアイデンティティーは、彼の意識を、モルガーンの場合同様、この状況を打開することに向けさせた (vv. 6147-92)。この場面で、血気に逸るトリスタンが語りかけているのは、マルケ王を含めた「宮廷の皆々方 (*ir hërren [alle]*)」 (vv. 6258f)²⁸とモーロルトだけである。彼と王との対話の描写も一度もなく、唯一マルケ王がトリスタンを翻意させようとしたが、思惑に反してトリスタンは思い留まらなかったことが詩人によって短く言及されているのみである (vv. 6242-49)²⁹。そのため R. Gruenter は、「ここでのマルケは行為する人物とはまったく思われぬ、そしてそれ故に、詩人は彼に直接話す特権を拒絶している」と見做しているが³⁰、むしろここで重要なのは、「宮廷の人々」の集団意識を一個の人格として扱う叙述法がとられていることである。

ところで、この屈辱的隷属を払拭する手段は、モーロルトとの決闘だけでなく、国と国との戦争という選択肢もあった³¹。事実、トリスタンはモーロルトに対して「一騎打ちか、あるいはしかし国同士の戦いか、あなたがどちらを望もうとも、あなたが選んだ方法を我々はいつでも確約します

し、それに応じます」(vv. 6380-83)と、その選択権を相手側に委ねている。トリスタンは当初、「一騎打ち (*mit einwige/kampf*)」によって解決をすることを前提に、マルケ王の廷臣たちに語りかけていたが、ここで「国と国との戦争 (*mit lanther/lantstrit*)」も選択肢としてあり得ることが示されており、その意味では、トリスタンはコーンウォールの宮廷の全権代表権を掌握したと言っても過言ではないだろう。しかし、コーンウォールの窮状を救うことが本来の目的であること、そしてこの後の会話における挑発的な台詞 (vv. 6407-6428) とそれに対するモーロルトの応対 (vv. 6429-6449) を鑑みても、モーロルトが一騎打ちしか望まないことを見越した上で、トリスタンは二者択一を相手側に委ねたと考える方がより自然であろう。

一方、マルケ王の宮廷の「諸氏たち」は、自らの力を以って一騎打ちはもちろん、国を挙げての戦争に対峙するような気概も見られない人々の集まりである：

自分の子供を差し出すくらいなら、むしろこの悪魔のような男と対峙して自身の命を失うほうがましだというような者を、我々のうちに一人も見出すことができませんでした。

(vv. 6209-13)

この集団は、不当に被っている屈辱に対して「その身と心に深く根ざした苦しみを、泣き濡れた目のまま、恥じ入ることもなくそして隠そうともせず、跪き、〔神に〕祈っている」(vv. 6038-47) ような、「臆病」あるいは「恐れ」が擬人化された一個の人格として認識され得る。それ故にこの擬人化された人格は、もはや自力では何事も為すことができず、他力本願の望みしか持ち合わせていない：

「もしなろうことなら、あなたが我々に与えて下さった希望 (*wân*) が、現実のものとなること、それが我々みな切なる願い (*ger*) です。」

(vv. 6230ff.)³²

このような「個」と「集団」との関係性のうちに、マルケ王の宮廷におけるトリスタンの優越を、ひいては両者の潜在的な敵対関係を見出すことができよう。トリスタンという「個」と、この「集団」との対照関係において、「彼ら」は、先に見たトリスタンに「称賛を与える人々」から、トリスタンの庇護の下で「怯える人々」となり、後にはトリスタンの存在自体を恐れ、彼に「嫉妬し、敵意を向ける人々」となる (本稿第4節参照)。

3-3. タントリス・エピソード

トリスタンは、不退転の覚悟でモーロルトとの決闘に臨み、トリスタンの「战友 (*stritgesellen*)」である「神と正義 (*got unde reht*)」(vv. 6980f.)³³ の助けによってモーロルトを斃すが、太腿に致命傷を負ってしまう。その傷をモーロルトに付き従っていた人々に悟られないよう、楯で隠すとい

う自らの機転によって、傷を治癒するわずかな可能性を残した。というのも、深手を負った時、勝ち誇ったモーロルトがトリスタンに語ったこと、つまりモーロルトの妹であるアイルランドの王妃イゾルデのみがその傷を癒すことができるという話 (vv. 6931-61) が、この用心深い行為の伏線となっていた³⁴。実際、どんな名医でも彼の傷を治すことができず、トリスタンは、傷の治癒のためわずかな可能性に賭け、危険を冒してアイルランドの地を踏むことを決意する。彼は、タントリスと名前を偽り、かつては宮廷の楽人 (*ein höfischer spilman*)、今は商人であると身分を偽って上陸に成功する (vv. 7560-7606)³⁵。この自らの弦楽の才能を拠り所にした策略によって、王妃イゾルデの寵愛を受け、傷も完治することができたトリスタンは、金髪のイゾルデの家庭教師として重用されるが、アイルランドの宮廷に長居をすることで、自分の素性が明るみに出ないかと恐れるようになる (vv. 8146-52)。暇乞いの場面でトリスタンは、「どこでもそうしていたように、〔王妃の面前でも〕素晴らしい知性によって (*in schoenem sinne*)」 (vv. 8160ff.)、故郷に妻を残してきたことを理由に帰国を願い出る。彼がなぜ結婚のモチーフをここで用いたのかについては、明確な根拠が示されていないが、「善意ある者ならば断ち切ることはないそのような結び付き」 (vv. 8202f.) という王妃イゾルデの台詞からも、「結婚していること、妻を故郷に残してきたこと」が帰国の正当な (特別な) 理由となり得る³⁶ ことは容易に察しが付く。

その知性によって傷の治癒の旅を完遂したトリスタンは、先述の誘拐エピソードでの捏造話同様、楽人・商人という身分から、宮廷貴族そして騎士としてマルケ王の宮廷に「復帰」したことによって、ここにアイデンティティー再獲得のための冒険は一応の結末を見る。ただし、この帰国は単なる現状への復帰に留まらない：

健やかなるトリスタンは、再びもとの生活をはじめた。彼には新しい生が与えられたのだ。彼は生まれ変わった人 (*ein niuborner man*) だった。彼の新しい生はたった今はじまったのであって、彼は楽しげで喜びに満ちていた。 (vv. 8310-15)

この新たな自己 (生) の獲得は、ここにトリスタンのアイデンティティーが確立したことを意味しているだけでなく、彼の実存が次なる次元、すなわちミネの地平へと移行していくことを暗示している。この暗示は、生まれ変わったトリスタンが、アイルランドの「光り輝くイゾルデ (*diu liechte Îsôt*)」 (v. 8256 u. a.)、「彼の女主人 (*seine[r] vrouwe[n]*)」 (v. 8302) の美しさを褒め称えている描写のうちにも見られるが、トリスタンの意識が (マルケ王から) イゾルデへと移るこの移行は、一足飛びに行われるものではなく、まだ一段階、しかし非常に大きな段階を踏まなければならない。それが「求婚の旅」である。

4. トリスタンに対する廷臣たちの嫉妬の顕在化

4-1. マルケ王の求婚政策という「陰謀」

王と宮廷は、彼〔トリスタン〕の考えに喜んで従っていたが、それも、あの忌々しい倦むことを知らぬ活力、すなわち休むことのないあの忌々しい嫉妬 (*nit*) が、彼らのもとの活動しはじめるまでのことだった。嫉妬が多くの廷臣たちの気持ちと風紀を曇らせたので、彼らは、宮廷や国中の人々が彼に授けた名誉と尊厳を羨んだ。彼らは、彼の事績について悪しざまに語るようになり、彼はきつと魔法使い (*ein zouberaere*) に違いないという噂を立てた。

(vv. 8316-31)

廷臣たちのこの嫉妬は、モーロルト・エピソードで見たように、もはや個人的な感情に由来しているのではなく、宮廷という組織体の構成員が共通して抱く集合心理として現前している。そしてここでは、これまでと違い、彼らの意識に羨望あるいは嫉妬というネガティブな感情が介在することによって、「個」と「集団」の明確な対立図式に発展しているが、トリスタンに対する「彼らの」拒絶の態度は、これまでは称賛の対象であったトリスタンの「そのような奇蹟にも等しい事績」(v. 8247) に対する畏怖を根拠にしているため、「魔術師」や「詐欺師 (*der pârâtiere*)」(v. 8346) といった空想的な誹謗中傷となって表れている。つまりここでは、トリスタンが例えば実際に「誰かの」既得権益を侵害しているのではなく、彼らの眼にはトリスタンという個の存在自体が、宮廷という集合体の現状安定・秩序にとって好ましくないもの、宮廷の秩序を安定させている諸関係に亀裂をいれかねないようなものなのと映っていると言えよう。そして、この漠然とした不安を拭うため、あるいは彼らの不安が漠然としたものだからこそ、彼らは次のような提案をマルケ王に突きつけるのである：

そこで、マルケ王の相談役を務めていた人々が決議したのは、王がひとりの妻をめとられて、娘であれ息子であれ、相続人を得られるようにと、マルケ王に昼夜を問わず熱心に勧めることであった。

(vv. 8350-57)³⁷

確かに宮廷の存続のために跡取りが必要であることは間違いないが、廷臣たちのトリスタンに対する嫉妬と、マルケ王の結婚という彼らの提案との「因果関係」はここではまだ明確にはなっていない。というのも、この廷臣たちの提案の根拠がどこにあるのか判然としないからである。先述したトリスタンの暇乞いの場面でマルケ王は、自分が「生きている限り、結婚して妻を持つつもりはない」(vv. 5154-67) と決意表明しているが、実はこの場にトリスタンとルーアル以外、他の廷臣たちが同席していたか否かで、二様に解釈ができるのである。まず、この暇乞いの場面では廷臣たちに関する描写がないことから、彼らは同席しておらず、三人のみの会話であったことを想定するの

は容易だが、他方、トリスタンの「手をとって誓おう」(v. 5153)というマルケ王の振る舞いを、公の下で行われた「誓約」³⁸と考えれば、(たとえ彼らの熱狂的な賛同が描かれていないとしても³⁹)その(マルケ側の)証人として廷臣たちが同席していたと考えることもできる。

さらに、この二様の解釈についてここで特に重要と思われるのは、マルケ王のあの誓いの台詞以降、舞台上におけるマルケ王の長期不在である。再びマルケ王が舞台上に登場するのは、廷臣たちによって結婚の提案がなされた、まさにこの場面においてであり、婚姻問題が彼自身の宮廷にとっていかに重大な案件かを印象付けている。そして、廷臣たちの提案に対してマルケ王が公然と「トリスタンが生きている限り、この宮廷に王妃 (*künigîn*) も恋人 (*vrouwe*) もいることはない」(vv. 8361ff.) ことを明言(再確認)すると：

それによって彼ら〔廷臣たち〕がトリスタンに抱いていた憎しみ (*haz*)、そして嫉妬 (*nît*) は以前よりも大きくなり、この憎しみと嫉妬はしばしば激しく沸き起こったので、彼らはその感情をもはや隠すことができず、頻繁に素振りやことばで〔その感情を〕彼に見せたほどだった。(vv. 8365-73)

そこで廷臣たちは、「トリスタンを死に追いやるためだけに」(v. 8453) 協議した結果が、*美しきイヅルデ*との婚姻を勧告することであった(vv. 8454ff.)。このような登場人物たちの会話と、それに伴う彼らの心理変化を鑑みれば、先の宣誓は三人だけで行われた「個人的な」もので、廷臣たちはそのことを知らずにいたと考える方が論理的展開としては自然なように思われる。

また、ここには、単にトリスタンという傑出した存在に対する人間的感情としての嫉妬心による敵意だけでなく、トリスタンとマルケ王の間に成立している(好意的な)「個人的感情」に対する、廷臣たちの共通認識としての「政治的判断」という対立構造も潜んでいる。つまり、嫉妬という人間的感情ゆえのものであっても、廷臣たちがトリスタン(およびマルケ王)に対してとった振る舞いは、一種の「政治的判断」として理解され得るものであり、この政治的判断は、「個」と「集団」の対立構造において、個人を抹殺しようとする「陰謀」の形態をとる⁴⁰。トリスタンは、マルケ王の甥であり、王位継承者の順位では、現状第一位の地位にある。騎士としての功績を鑑みれば、マルケの跡目を引き継ぐことに何ら支障はない。しかし、マルケが、トリスタンを寵愛し重用しているとは言っても、将来にわたって自らの婚姻を破棄し、直系の血筋を自らの手で絶やそうとする姿勢は、家門の維持を重要視する当時の貴族社会の在り方において、とりわけ高位貴族の男子の振る舞いとしては非宮廷的と言わざるを得ない⁴¹。さらに、マルケ王の婚姻が成立したとしても、トリスタンに対する極端な愛顧振りから、マルケ王が王位継承順を容易に飛び越えさせて、結局自分の子ではなくトリスタンに家督を相続してしまう恐れがあることは否定できない。彼らにとって、宮廷秩序を安定させるには、もはやトリスタンを宮廷から追放するしかなく、そのひとつの手段として、彼らは謀殺という計画を選択したと言えよう。

そして、このような廷臣たちのエスカレートは、トリスタン自身にも自分の命が危険に曝されていることを察知させ、廷臣たちの望み通りマルケ王に妻を迎えることが、この局面を打開する方法であることを認識させる (vv. 8373-85)。マルケ王もまた、廷臣たちがトリスタンを亡き者にしようとして企んでいることに気付いているが、彼は彼で、自分の意志を貫こうとする。この三者三様の思惑が絡み合いながら、王の婚姻問題に関する議論が進んでいく。まず廷臣たちは、トリスタン謀殺計画に、マルケ王とイゾルデ姫との婚姻を組みこもうとするが、この縁組は、単にマルケ王の世継ぎのためだけでなく、コーンウォールとアイルランドの不和を解消する手立てでもあり (vv. 8490-8504)、二重の意味で国益に適ったものである。廷臣たちにイゾルデ姫との結婚を勧められたマルケ王は、トリスタンを守るための策略として⁴²、話に聞くイゾルデ姫以外の女性を妻に迎えるつもりはない (vv. 8506-22)、と廷臣たちに告白する：

ところが、そこで王の相談役たちは言った。「わが君、ここに居られますトリスタン殿は、その地の宮廷について明るいですし、もしあなた様の使者として遣わすことができましたら、万事うまく進み、確かな成果がもたらされることでしょう。 (v. 8523-29)

これは、コーンウォールの者がアイルランドに一歩足を踏み入れれば捕えられ命がない (vv. 7204-22) ことを折り込み済みでの提案だが、実際そのような状況下でトリスタンは一度侵入し成功し、見事生還したことから、実現不可能な提案ではない。もちろん、これは余りにも不当な提案には違いない：

「そちたちの提案はひどいものだ」、マルケ王は言った、「そちたちはあまりにもトリスタンに不利益や苦難を与えんとすることに熱心すぎる。彼は、そちたちとそちたちの子孫のために、すでに一度死んだのだ。しかしそちたちはまたもや彼を死なそうとしている。ならぬ、コーンウォールの者たちよ、そちたち自らが行くべきではないか。」 (vv. 8535-43)

ところが、トリスタンの騎士としてのアイデンティティーは、彼をして「あなたのお気持ちが向かれることであればなんでも、わたしが真っ先に、他の誰よりも進んで事に当たるのは理に適ったことです」と答えさせる (vv. 8547ff.)⁴³。彼がこの提案を承諾したとき、トリスタン自身が有していた実現可能性あるいは「期待 (*zuoversiht*)」(v. 8923) とは、アイルランドの民が龍に苦しめられ、龍退治をした者にイゾルデ姫を与えるという布告 (vv. 8902-24)、それに加え、タントリスとしてかつて王妃イゾルデとイゾルデ姫から享けた「愛顧 (*huldefn*)」(v. 10547) であった。そして、騎士としての義務感と、計画遂行の確かな可能性をうちに秘め、トリスタンは、先のマルケ王の台詞、「コーンウォールの者たちよ、そちたち自らが行くべきではないか」、を自らの計画に引用する：

「みなにお命じ下さい、彼ら自身がわたしと一緒にいき、行きも帰りもわたしと共にあなた様の用事〔を果たすこと〕とあなた様の名誉のことを心に掛けるようにと。」(中略)「たとえ彼らが死のうが生きのびようが、わたしも彼らと同じ道を歩むことになりましょう。わたしは彼らに見せてやりたいのです、もしこの国に世継ぎがないままだったとして、それがわたしの責任なのかどうかを。(中略)あの美しきイゾルデ姫があなたのものになるならば、たとえ我々みな死に絶えたとしても、それは大した損害ではないでしょう。」 (vv. 8554-77)

思惑通りに事が進んだかに見えた廷臣たちにとって、トリスタンのこの反撃は予想外の事態であり、「マルケ王の相談役たちは、話がどんな向きになったかを聞き知ったとき、彼らの人生のうちで経験したこともないほど悲しくなった」(vv. 8578ff.) のは当然だが、トリスタンのこの提案は、一見すると廷臣たちに対する当てつけあるいは皮肉のようにも見えなくもない⁴⁴。しかし、もし単なる当てつけならば、廷臣たちにはその要求を拒否する権利があるはずだが、彼らはここで拒否権を行使することができなかった。というのも、トリスタンの提案がこの縁組の成否に少なからぬ影響を及ぼすものであることを彼ら自身理解していたからこそ、嫌々ながらも随行せざるを得なかったのである (Vgl. vv. 9658-98; 10779-802)。実際後に見るように、イングランドとアイルランド両家の婚姻の成立は、個人的案件であると同時に政治的案件であり、彼ら廷臣たちがアイルランドの宮廷に参内することは、トリスタンが単身乗り込んで事情を説明する以上の説得力と政治的保証の効力を有しているのである (次項参照)。このことを鑑みれば、トリスタンのこの計画を、廷臣たちの腹黒い陰謀に対する単なる当てつけと見做すのは早計であろう⁴⁵。むしろ、トリスタンの知性は、この婚姻を成立させるシナリオをすでに構想していたのである。

4-2. 龍退治：個人的和解と国家的和解

ここで再び廷臣たちがトリスタンに対して抱いた嫉妬心の根拠について見てみたいと思う。モーロルトとの決闘での勝利とアイルランドからの生還は、トリスタンという存在に(恐ろしい)魔術的な特性を付与せずにはいられなかった。そして、そのような得体の知れない者を自身たちの君主の正当な跡継ぎと見做すこと、そして実際に相続が行われたとしたら、モーロルトの屈辱的貢納の義務はあったものの、これまでの平穏な生活を維持できていた現状から、生命の危機が日常的になる生活へと激変してしまうのではないかという恐れを抱いたと考えることは十分可能であろう。なぜなら、アイルランドへ帆を向けた船上で、彼らが恐れているのは、(と同時に一縷の希望であったのは)トリスタンの「無鉄砲さ (*vrecheit*)」だからである：

「賢さと手腕がこの人には多分に備わっている。もし神さまが我々に幸運を与えてくだされば、我々はきっと彼と一緒に生き延びることができるだろう。彼が、やみくもな無鉄砲さを自制さえしてくれれば。この無鉄砲さが彼にはありすぎる。彼は勇敢すぎて、向う見ずすぎるし、今

も自分がしていることを気に掛けていない。彼はおそらく我々だけでなく、自分自身の死でさえも、微塵も気に留めないのだろう。」 (vv. 8660-70)

トリスタンの振る舞いは確かに無鉄砲のようにも見えるが、それは純粋な「力比べ」、すなわち剣の戦いに関する部分だけであり⁴⁶、それ以外の部分では用心深く計算高い計略を立てた上での行動をとっている。それは、この求婚の旅においても見られる。彼は、再び商人と身分を偽ることで難なくアイルランドへの再上陸を果たす⁴⁷。そして、龍との闘いは、モーロルトの場合同様（そしてモルガンとは対照的に）、知略の戦いではなく腕力の戦いである。ここではモーロルトの時とは異なり、「神の思し召し・意志」に関する言及はないものの、モーロルトが「悪魔の僕 (*vâlandes man*)」としばしば形容されていたように (v. 6213 u. 6906; vgl. auch v. 6852)、龍もまた悪魔の化身であり (v. 8972; 9048)、神の敵対者という意味においては、トリスタンの勝利は必然であったと言える。

ところで、このような天運とは異なり、切り取った龍の舌の毒気によって意識を失ってしまう場面では、彼の先回りの知性⁴⁸が示されている。彼が龍の舌を切り取って懐へ隠しておいたのは、自らが龍の討伐者であることを証明するために他ならないが、これはトリスタンが龍と対峙する直前、内膳頭の一団が逃げ帰るのを目撃したことが契機になっている。もし、この証拠品なしに龍の死骸をそのままにってしまったとしたら、後に実際内膳頭がしたように、龍の身体の一部を切り取って自らが討伐者であると名乗り出る輩が現れないとも限らない、とトリスタンが想定したとしても何ら不思議はないだろう。

また、アイルランドの人々に対して述べた龍退治の理由について；

「わたしたち〔商人〕は、誰がわたしたちにとって信用のおける人たちなのかわかりません、という人も人々はわたしたちにしばしば暴力を振るうからです。そこで私は思いました、たとえどんな方法でも、国中の人々にわたしのことを知ってもらえるようにできたなら、それはわたしにとって良いことだろうと。異国の地で〔その名を〕認知されることは商人にとっては富を増やしますし。お妃さま、わたしはそのように考えたのです。龍についての噂はずっと以前からわたしも知っておりましたので、この国の人たちの間で庇護と恩寵を見出すためのよりよい方策として、これを討つしかないと思ったのです。」 (vv. 9530-44)

このように説明し、マルケ王のことは伏せていた。この配慮は当然のことではあるが、もし金髪のイゾルデに正体を突き止められてしまうという想定外の事態がおこらなかったとしたら、*タン・トリ*・*ス*が、自身が実はマルケ王の求婚の使者であることをどのように切り出したのかについては作中の記述から想定するのは非常に困難である。唯一考え得るのは、内膳頭の欺瞞を暴き、トリスタン自身の命の安全を誓約（和解の口づけ：v. 10534, 10664f.）によって確実なものとした上で自身の正体を明かし⁴⁹、イングランドとアイルランド両宮廷の利益になることを説いて、金髪のイゾルデと

マルケ王との婚姻をまとめたであろう、という実際の出来事の推移とは順序が入れ替わったシナリオである。もちろん、これはあくまで物語の筋にはない単なる推測に過ぎないが、実際、彼が金髪のイゾルデとマルケ王との縁談をまとめるにあたっては、アイランドの宮廷において、タントリスという偽りの姿から宮廷騎士トリスタンとしてのアイデンティティーを復活させる必要性があり、今まさにその通りになったのである。

結果トリスタンは、王妃および金髪のイゾルデの彼に対する憎しみという個人的感情を放棄させることによって (vv. 10500-36)、コーンウォール・アイランド両国の政治的和解も成立させる。というのも、アイランド王グルムーンにとって、モーロルト殺害の件は、自身よりも王妃イゾルデに関係が深い、いわば彼女の私怨に該当するものであり、それゆえ彼は「その話しはそなたに任せよう」と語り (vv. 10646ff)、彼もまたトリスタンを受け入れるのである。ただし、ここではまだ両国の和解に必要な「保証」が欠けている。グルムーンはトリスタンに「そなたの話が確かであることを、私はどのように知ることができよう」と問いかける (vv. 10683ff)。ここで、沖合に残してきた廷臣たちがその「保証 (人) (*gewisheit*)」 (v. 10688) として召喚されるのである。

トリスタンが婚姻話をまとめた後、クルヴェナルによって船上の廷臣らに吉報が齎されたとき：

彼らはみな喜んだ。しかし、トリスタンの名誉よりも、国同士の和解のほうを喜んだ者も多かった。嫉妬深い貴族たちは、かつてのように再びささやき合い、互いに話し合った。そして彼らは、この偉大なる成功のために、今まで以上にトリスタンを魔術使いだと責め立てた。

(v. 10787-96)

このように、トリスタンに対する嫉妬・敵対心は、なおも潜在的な実存の危機としてマルケ王の宮廷内で蔓延ってはいるものの、表面化した「個」と「集団」の敵対関係は、ここに一応の結着を見る。

結び

以上のように、トリスタンの知性は、嫉妬や羨望に起因した人々の策謀、そして彼が追い込まれた状況をことごとく乗り越えていく。この知性の働きは、トリスタンの宮廷人として、騎士としてのアイデンティティー形成およびその確立に、その都度大きな意味を与えていることはすでに見た通りである。すなわち、誘拐という事件からはじまったトリスタンの実存の危機は、三人の父親との関係を再構築し、マルケ王とイゾルデ姫との婚姻をまとめ上げることで、新たにマルケ王の宮廷における宮廷人 (騎士) としての実存を確立させるに至る。このような個々のエピソードにおいてトリスタンに対する策謀が働くメカニズムには：

称賛 > 羨望・嫉妬あるいは不安 > 策謀 (陰謀)

という段階的な展開が見られると同時に、物語の骨格を成す構造として：

誘拐 > モルガン、モーロルトおよびタントリス・エピソード > 求婚の旅

というトリスタンの宮廷的現存在が上昇していく構図も見られる。ゴットフリートが、このふたつの、そして二重の段階的上昇を伴う構図を意識した上で、個々のエピソードを有機的に組み合わせ、詩作したかについては、確かなことは言えないが⁵⁰、少なくともこの構図が物語の中に埋め込まれており、それ故に物語の筋を展開させる原動力となっていることは明らかである。その意味では、この物語は、トリスタンの心理学的な成長物語とは言えないまでも、ゴットフリートが、例えば詩人独自の見解を交えた多様な付論⁵¹や、マルケ王を不在にする舞台上の手法などによって、個々の出来事や行為の背後にある登場人物たちの心理を焙り出し、それを連続するように繋ぎ合せている（あるいは繋ぎ合せようとしている）ことは看取できよう。

ところで、この後「媚薬」エピソードを挟んで、金髪のイゾルデがマルケ王の宮廷に足を踏み入れることで、物語は新たな展開を迎える。物語前半部で展開された「命を守るための知略」は、トリスタンの宮廷人としての実存にかかわるものであったが、彼が宮廷人であらんとしたために、マルケ王の廷臣たちの実存をも巻き込み、「個」対「集団」の様相を呈した。一方、物語後半部分では「イゾルデとの恋を秘匿するための知略」が展開されるが、それは「一人の」廷臣の嫉妬からはじまる：

その頃トリスタンは一人の仲間 (*companjân*) を持っていた。彼は高位の貴族で、名をマリョドーといったが、彼は王が抱えていた領主の一人であり、また王の第一の内膳頭でもあった。彼は、愛らしい王妃のことを想っていたが故に、〔王妃と親しい〕トリスタンと親交を持ち、彼に好意を抱いたのであった。(vv. 13460-68)

このマリョドーの横恋慕に見られるように、物語後半部の筋を展開させる中心的原動力は、トリスタンとイゾルデをめぐる策謀へと移っていくが、これについては稿を改めて考察したい。

注

¹ テキストは以下の版を使用した：Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. 3. Bde. [Bd. 1: Text. Verse 1-9982; Bd. 2: Text. Verse 9983-19548; Bd. 3: Kommentar] Stuttgart 2006¹¹.

² リヴァリーオンとブランシェフルールは、後にモルガンがこの二人の関係を「情事 (*vrüntschaft*)」(v. 5402)と揶揄しているように、半ば駆け落ち同然でマルケの宮廷から出奔したのであったが、バルメニーエの宮廷では正式な結婚式が執り行われたことから (vv. 1623-33)、彼らの宮廷的名誉あるいはその地位、およ

びトリスタンの嫡出子としての血統も公に認められるものであったと言える。そして、リヴァリーンの忠実なる家臣、主馬頭ルーアルが、トリスタンの血統を公には伏せたまま彼を養育したのは、モルガーンの脅威を回避するためであり (vv. 2023-41)、彼の両親のスキャンダルを隠蔽しようとする意図の下で行われたものではない。

- ³ この他にも、*wīs, sinneclīch[er], bedāht, vorbedaehtic, gewar* など、トリスタンの知性的特徴を表す形容が多用されている。
- ⁴ Vgl. Hugo Kuhn: *Tristan, Nibelungenlied, Artusstruktur*. In: Hugo Kuhn: *Liebe und Gesellschaft* (Kleine Schriften III). Stuttgart 1980; Ralf Simon: *Thematisches Programm und narrative Muster im Tristan Gottfrieds von Strassburg*. In: *ZfdPh* 109 (1990), S. 354-380; Monika Schausten: *ich bin, alse ich hân vernomen, ze wunderlīchen maeren komen*. Zur Funktion biographischer und autobiographischer Figurenrede für die narrative Konstitution von Identität in Gottfrieds von Straßburg 'Tristan'. In: *PBB* 123 (2001), S. 24-48.
- ⁵ Monika Schausten: a. a. O., hier S. 38.
- ⁶ この誘拐の場面でゴットフリートは、窮地に立たされた子供一般について、「(というのも、) 子どもというものは、その身に何かがあったとき、泣くより他にできないものだから」(vv. 2485f.) と述べ、トリスタンもまたその点では例外ではないとしており、(当時の) 世間一般の共通認識から、トリスタン個人の振る舞いの妥当性を説明する手法が採られている。
- ⁷ ゴットフリートは、トリスタンの行為・人生について、ほぼ一貫して、神の意に適ったもの、神の加護が得られるものとして構想していることは明らかであり、彼の窮地を救う出来事を神の御業として説明している。もちろん、ゴットフリートの『トリスタン』における「神」が、中世当時の(厳格な)神学的定義における「神」の在り方と必ずしも一致していたとは限らない。Vgl. Dietmar Mieth: *Dichtung, Glaube und Moral. Studien zur Begründung einer narrativen Ethik mit einer Interpretation zum Tristanroman Gottfrieds von Straßburg*. Mainz 1976, bes. S. 82; 93 u. 151ff.
- ⁸ 当時、狩猟は高貴な身分の者たちの専売特許であり、狩人のモチーフは宮廷文化圏に属する人であることを容易に想起させると言える。Vgl. Joachim Bumke: *Höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter*. München 2005¹¹ (1. Aufl. 1986), S. 167f., vgl. auch Werner Rösener: *Jagd, Rittertum und Fürstenhof im Hochmittelalter*. In: Werner Rösener (Hg.): *Jagd und höfische Kultur im Mittelalter*. Göttingen 1997, S. 123-148.
- ⁹ 傍点は筆者による加筆。
- ¹⁰ 同様のことは巡礼の場合にも当てはまる。トリスタンが、巡礼の質問に対し、実に用心深く「益とも不利ともならぬ範囲で (*niwan ze staten und ze nôt*)」答えたように (v. 2734-38)、相手の関心を察知し、会話の内容を吟味する話し振りは彼独特のものである。
- ¹¹ Rainer Gruenter: *Der Favorit. Das Motiv der höfischen Intrige in Gotfrids Tristan und Isold*. In: *Euphorion* 58 (1964), S. 113-128, hier S. 115f. ここで R. Gruenter は、マルケ王を「容易に激しやすい人」と形容し、廷臣たちの拍手喝采が彼から節度を奪い、「前代未聞の寵愛のしるしを積み重ねる」振る舞いを駆り立てたとしている。
- ¹² このような、「見ること」が心の喜びとなる、という表現は、中世文学によく見られる「目の愉しみ (*ougenweide*)」の文学的トポスであり、マルケ王だけでなく、廷臣たちもまた、この「目の愉しみ」をトリスタンに見出している。
- ¹³ *nu suln ouch wir gesellen sin, / du der min und ich der din*.
- ¹⁴ Rainer Gruenter: a. a. O., hier S. 116.
- ¹⁵ R. Krohn は、この場面を、ゴットフリートのマルケ王に対する「中傷」と見做している (Rüdiger Krohn: *Erotik und Tabu in Gottfrieds 'Tristan': König Marke*. In: *Stauferzeit, Geschichte, Literatur, Kunst*. Hg. R.

Krohn, B. Thum, P. Wapnewski, Stuttgart 1978, S. 362-376, S. 376)。

- ¹⁶ また、「そなたは、わたしのいとしい妹によってわたしにもたらされたのであるから、もし神さまがお許し下さるならば、わたしはこれからは幸せに暮らしていこうではないか」(vv. 4308-11) というマルケの独白には二重の意味が込められていると考えられる。つまり、ブランシェフルールが死んでしまったことに対する悲しみを忘れること、そしてブランシェフルールがリヴァリオンによって宮廷から連れ去られたことに対する悲しみ(あるいは遺恨)を忘れることであり、マルケは、いわばこの二重の喪失を、トリスタンという存在によって贖おうとしていると言える。
- ¹⁷ 宮廷の廷臣たちもまた、当初ルールを「宮廷風の教養ある商人 (*der höfische koufman*)」と思っていた (vv. 4054ff.)。
- ¹⁸ ルールはまた、この台詞の直前で以下のように語っている:「愛する者よ (*vriunt*)」と彼[ルール]は言った、「わたしは長いこと、おまえのために、とても熱心に、そして非常に腐心しながら細々とだが商売 (*marschandise*) に精を出してきた。しかしこのことは今やすべて良い結果となった」(vv. 4353-59)。
- ¹⁹ ガンディーン・エピソードでは、この型どおりの言い回しが、マルケ王を窮地に追い込む(イゾルデを奪われてしまう)ことから (vv. 13184-253)、このような定型表現の使用に特別な注意を払う必要がなかったことが窺える。
- ²⁰ Vgl. Lore Peiffer: Zur Funktion der Exkurse im ‚Tristan‘ Gottfrieds von Straßburg. Göppingen 1971, S. 112-118; Wolfgang Dilg: Der Literaturexkurs des ‚Tristan‘ als Zugang zu Gottfrieds Dichtung. In: StauferZeit. Geschichte – Literatur – Kunst. Hrsg. von Rüdiger Krohn, Bernd Thum und Peter Wapnewski. Stuttgart 1978, S. 270-278; Patrizia Mazzadi: Autorreflexionen zur Rezeption: Prolog und Exkurse in Gottfrieds ‚Tristan‘. Trieste 2000, S. 81-91.
- ²¹ Vgl. vv. 2128ff. 本稿序参照。
- ²² Vgl. vv. 5288-5308.
- ²³ Vgl. Otfrid Ehrismann: Ehre und Mut. Âventiure und Minne. Höfische Wortgeschichten aus dem Mittelalter. München 1995, S. 154-161.
- ²⁴ Vgl. vv. 5309-36; 5490-5536; 5584-5608. トリスタンは、モルガンとの口論の末、彼を一刀の下に切り伏せたが (vv. 5445-55)、この復讐劇の最高潮は、ルールの援軍の力を借りつつも、モルガン勢の追撃隊すべてを打ち倒す場面であり、ここではその集団戦術を指揮したトリスタンの知略が前面に押し出されていると言える。
- ²⁵ 彼がパルメニーエを去れば、ルールとこの国は喜びと気概を失うことになるが、一方でパルメニーエに留まれば、より高い名誉、その源泉であるマルケ王の勧めを反故にすることになる、というトリスタンの葛藤をゴットフリートが代弁している (vv. 5657-68)。
- ²⁶ トリスタンは、采邑権だけは自身の権利としてそのままにしておいた (vv. 5808-11)。
- ²⁷ コーンウォールとイングランドは5年毎に、宮廷貴族あるいはそれに準ずる有力者の子息30人をそれぞれ献上しなければならなかった。この取り決めを破棄する方法(権利)は、モーロルトとの一騎打ちか、国と国との戦争を行い、勝利することであった。
- ²⁸ 後には、「相談役 (*die Markes râtes pflâgen; Markes râtman*)」、「貴族諸君 (*die barûne*)」といった呼びかけ方も見られる。
- ²⁹ モーロルトはマルケ王に向かって話しかけ、マルケ王もそれに応える一節があるが、これはトリスタンがコーンウォールの宮廷における全権を委任されているかどうかの確認であり (vv. 6340-57)、むしろこのことによってもマルケ王がこの場面で何らの役割をも果たしていないことが明らかになる。
- ³⁰ Rainer Gruenter: a. a. O., hier S. 120. このようなマルケ王の「王者としての資質を失った」人物像は、後々トリスタンの人生に大きな影響を及ぼすことになるが、マルケ王の人物像の詳細については稿を改めて考察する。

³¹ 注 27 参照。

³² Vgl. auch vv. 6473-78.

³³ ゴットフリートは、この決闘を「二つの陣営同士 (*von zwein ganzen rotten*)」(v. 6873) の戦いとして描写している。すなわち、四人力のモーロルトに対して、トリスタン陣営を構成しているのは、「神と正義という、勝利をもたらす二人の援助者」(vv. 6184f.; 6883)、三人目は彼ら二人の戦士であり、信頼篤い奉仕者トリスタンその人、そして四人目は「苦難のなかでも奇蹟を呼び込む揺るぎない覚悟 (*willeger muot*)」(vv. 6887f.) である。

³⁴ この点については、王妃イゾルデの治療を受ける際にも再び言及されている：(しかし) 彼があんなに用心深かったことが今や、彼の役に立ち、彼は快復したのである。我々はここで、慎重で思慮深い人が、その素晴らしき用心深さを、どんなにしばしば好ましい結果へと至らしめるか、ということを知り、教えられるというものだ (vv. 7903-10)。この言及からも、ゴットフリートは、楯で傷を隠すというトリスタンの行為が(あまりにも先を読み過ぎるという印象を与える) 不自然なものではなく、彼の知略に長けた性格ゆえのものであることを強調していると言える。

³⁵ トリスタンは、傷を負っていることについては、海賊に襲われた時にできたもので、商売仲間は皆切り殺されたが、自分は竖琴を持っていた(本職が楽人であった) おかげで命拾いをしたと語った (vv. 7581-95)。

³⁶ トリスタンは、よほど特別な理由がない限り、王妃と姫が暇を与えてくれないだろうと確信していたことから (vv. 8153ff.)、「結婚」は、少なくとも王妃にとって特別な意味を有していたことを示している。

³⁷ 傍点は筆者による加筆。

³⁸ 同様の描写は『ニーベルンゲンの歌』にも見られる (Str. 860)。

³⁹ 暇乞いの場面でのマルケ王のこの提案は、トリスタンが騎士となる決意をした際に示した「援助」の内容 (vv. 4460ff.) の繰り返しでもある。また、最初にこの提案がなされたとき、廷臣たちは諸手を挙げて賛同の意を示している (vv. 4492f.)。本稿 2-2 参照。

⁴⁰ Vgl. Rainer Gruenter: a. a. O., hier S. 122f. R. Gruenter は、ホイジンガの陰謀論を引き合いに出しながら、廷臣たちの提案を分析している：「彼らは狡猾に仕組まれた陰謀によってマルケの宮廷における権力関係を変えようと願っていた。この陰謀は二重の目標を有している：陰謀は現行の権力所有者、ここではマルケを孤立させ、そして中立化すること。また、彼を貴族たちの願いに従順にさせるだけでなく、王位要求者、すなわち権力の潜在的な継承者〔トリスタン〕の要求を無用のものにするものである」(S. 123)。

⁴¹ Vgl. Joachim Bumke: a. a. O., S. 534.

⁴² 「このことがいつか実現するなどは、彼にはまったく思いもよらなかった」(vv. 8521f.) というように、マルケ王は、実現不可能な計画を廷臣たちに突き付けて、自身の婚姻話を頓挫させようと試みたが、むしろこれは、廷臣たちの提案に対する軽率な同調となってしまっている。このことが思慮深いトリスタンと、マルケ王の人物像の対照性を示す一端となっていることは明らかだが、マルケ王の基本的人物像に軽率さ、無思慮といった否定的要素を付与するか否かについては、議論の余地がある。

⁴³ この承諾の背後にあるトリスタンの意識について、マルケ王の告白が偽り(策略)であったことをトリスタンが見抜いていたかどうか、そして仮に見抜いていたとして、その上でこの提案を承諾したのかは判読不可能である。

⁴⁴ Rainer Gruenter: a. a. O., hier S. 126.

⁴⁵ R. Gruenter は、トリスタンの意識について、「彼は、彼特有の不惑さによってマルケの再度の異議を聞き流して、手も足も出ない敵対者たちのあからさまな驚きと戦慄をおもしろがっている」(S. 126) のであって、「トリスタンにとってアイルランドへの旅はもっぱら命知らずな暇つぶしとしての冒険 (*à l'aventure*) 以外の何物でもなかった」(S. 128) と見做しているが、次項で取り上げるような「無鉄砲さ」と、冒頭から予告されている「苦難に恵まれた人生」という聴衆・読者の同情を誘うようなコンセプトに従えば、このような逆境をシニカルに受容する姿勢、そのような享乐的な側面をトリスタンの人物像に見出すことはできないだろう

う。

⁴⁶ 絶大な力を持つ相手に対して、「危険な事柄〔戦い〕に未熟なトリスタン (*Der unversuochte Tristan ze nôtlichen dingen*)」(vv. 6534f.)の戦いに臨む姿勢は、「運を天に任せる」という印象を受ける (vgl. vv. 6111-28; 6147-61; 6450ff.)と同時に、神がトリスタンの勝利を望まれた、あるいは「正義 (*reht*)」が勝利を得たという構図をゴットフリートが用いているのは明らかである：「というのもモーロルトは死すべくして死んだのだから」(v. 7224)。注7も参照。

⁴⁷ この再上陸での主馬頭との会話の場面では、トリスタンが以前タントリスとして、そして金髪のイゾルデの家庭教師として、アイルランドの宮廷に滞在していたことを鑑みれば、主馬頭がトリスタン (タントリス)のことを知っていた、という当然の予見と矛盾するように思われる。その一方で、タントリスの宮廷における活動範囲が、金髪のイゾルデの家庭教師に「限定された」ものであったと考えれば、また、当時の宮廷生活において、特別の場合を除いて、女性と男性とが同じ場に居合わせる機会がほとんどなかったことを鑑みれば (主馬頭が軍務を司る職柄であり、姫君の家庭教師との職務的な異質性を考慮すればなおさら)、主馬頭がタントリスの評判は耳にしているにもかかわらず実際の面識はなかったと想定することも可能である。

⁴⁸ 注34参照。

⁴⁹ タントリスとして身分を偽り、王妃イゾルデの許で治癒を目論んだのは、「〔トリスタンにとって大きな〕危難ゆえであり、それはまさに死に他ならなかった」(vv. 10314f.)からであるが、これは、内膳頭問題の解決を交換条件に (あるいはこの交換条件がなかったとしても)、トリスタンの行為が赦免される十分な理由となり得たと言えよう。

⁵⁰ さらに、個々のエピソードには (宮廷からの)「離脱と復帰」という循環モチーフも見られるが、このモチーフは「媚薬」以降のエピソードにも見られるものであり、この点については稿を改めて考察したい。

⁵¹ 注20参照。